

身体の動きが不器用な幼児への保育に関する実態調査

Survey on Childcare for Young Children with Clumsy Physical Movements

守 巧ⁱ⁾ 守 渉ⁱⁱ⁾ 石 原 正 仁ⁱⁱⁱ⁾
MORI, Takumi MORI, Wataru ISHIHARA, Masahito

Abstract

The purpose of this study is to clarify the image of clumsy children as perceived by nursery school nurses as Study 1, and to grasp the actual conditions of childcare, such as considerations and innovations for such children, by means of a questionnaire survey. Study 2 is to conduct interviews with nursery school nurses with various years of experience to clarify the actual situation in depth, including more detailed considerations and practices that cannot be covered in Study 1. The results showed that when considering support for children's clumsiness, childcare workers gave consideration to the emotional aspects of children arising from clumsiness. Specifically, they were concerned about preventing a decline in self-esteem and about the child's resistance to physical movement. In addition, they shared information with fellow childcare workers and parents to provide support.

キーワード：不器用さ、保育実践、KH Coder、SCAT

I. 目的

近年、保育現場において「気になる子」への保育が大きな課題となっており、気になる子をめぐる研究が盛んに行われている¹⁾²⁾。しかし、気になる子に関する研究が活性化しているものの、「気になる子」という用語には明確な定義はない。

守・山崎・駒井 (2013)³⁾は、「気になる子」という用語に対して、「多様な所見はあるが明確な診断名があるわけではないものの、保育者にとって日常の保育をするうえで困難さがある子ども」としている。また、本郷・澤江・鈴木・小泉・飯島 (2003)⁴⁾は「何らかの障害があるとは認定されていないが、保育者にとって保育が難しいと考えられている子ども」、末次 (2019)⁵⁾は「明確な診断名がないものの発達障害の特性が見られ、保育者にとって日常の保育をする上で困難さがあり、特別な支援・配慮を必要としている子ども」としている。詳細な内容や表現には相違があるものの、子どもに何らかの困難さがあることは共通している。この「困難さ」について村井・村上・足立 (2001)⁶⁾や水野・平野・別府

(2013)⁷⁾は、身体的な不器用さを挙げている。一方、運動面、とくに身体的な不器用さといった運動面での困難さを示す子どもにおいて、我が国では教育的支援が認知されているとは言い難く、具体的な支援方法に関する研究の蓄積は少ないのが現状である⁸⁾。また、川島・奥田 (2017)⁹⁾によると、保育者は子どもの姿について言葉よりも行動面に目がつきやすく、特に、体操・製作の「できる」「できない」を評価として捉えやすい、と指摘している。また、保育者は手先の運動を重視する視点から不器用さに着目しやすいとも指摘している。

これらのことは、保育者にとって子どもの身体的な不器用さは、評価的な視点から気になる子として映りやすいものの、具体的な支援まで結びつきにくい現状を示唆している。

保育所保育指針 (厚生労働省, 2018)¹⁰⁾の総則には、「乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」とあり、友だちと協力したり、自ら環境へ関わったりすることで多面的な学びをしていく重要性が示され、そのような環境を整える保育士の役割について示されている。しかし、身体的な不器用さがある子どもは、同年齢の子どもとの遊びに参加できなかったり、思うように道具などを使えなかったりすることから、そもそも定型発達児が自然と育んでいく能力を身に着けることが困難な環境にあると予想さ

i) こども教育宝仙大学 教授

ii) 宮城学院女子大学 准教授

iii) こども教育宝仙大学 教授

れる。

また、「気になる子」に焦点化していないものの、身体的な不器用さがある子どもへの課題については、これまで様々な報告がなされている。たとえば、Losse, Henderson, Elliman, Hall, Knight & Jongmans (1991)¹¹⁾によると、不器用さは年齢の上昇に伴って自然に消滅していくものと考えられてきたが、近年の研究からは、一部の子どもは年齢が進んでも容易に改善しないとしている。さらに、Cantell, Smyth, & Ahonen (1994)¹²⁾は、幼児期に運動面での顕著な遅れが判明した事例を追跡調査し、約半数で青年期に至っても症状が改善されず、運動面のみならず学業面でも自己評価を低下させることを指摘した。瓜生・浅尾 (2013)¹³⁾も、学校に上がれば運動のできなさが体育の時間などに本人や周囲の子どもにもわかりやすいため、劣等感や不安感、低い自己概念などとなって二次的な問題を拡大しかねない、としている。

これらのことは、乳幼児期の早い段階で子どもの身体的な不器用さに気づく必要があるとともに、不器用さに対して何らかの適切な支援をしなければ、不器用さを保持したまま成長していき、自尊感情の低下をはじめとする二次的な問題を引き起こしかねないことを意味している。

しかし、先行研究の多くはアメリカ精神医学会のDSM-Vにおける発達性協調運動障害 (Developmental Coordination Disorder : DCD) を引き合いに出して、論じているものが大半を占める¹⁴⁾¹⁵⁾。そして、チェックシートを用いた調査や尺度の妥当性を検討するものが主になっている。しかし、これらの研究は子どもに「障害があること」が前提で論考されている。一方で、そもそも保育者は子どもの不器用さと障害を関連付けて子どもの姿を捉えているのか、など丁寧に検討する必要があるのではないだろうか。つまり、保育者は、保育現場で目にする子どもの不器用さと障害とを結びつけて関わっているのか疑問が残る。くわえて、子どもの不器用さに対して保育者を対象とする発達検査尺度での調査があるか¹⁶⁾¹⁷⁾、より実態に即した現状を探るには日常の園生活に埋め込まれた保育中の子どもの姿や保育者による支援の実態を検討すべきである。保育者が何らかの働きかけをして不器用さを検証するのではなく、保育中の遊びや生活動作などから不器用さを探る方が把握しやすく、そのような不器用さに対して保育者がどのような支援をしているのかについての検討が求められる。

このように、先行研究は散見されるが、保育者が子どもの不器用さを感じる場面やそれへの支援の実態は明らかになっていない。より詳細に不器用さを探るためには、不器用さがある子どもの実態を示しつつ、日常的な配慮や具体的な支援など、実態を浮かび上がらせる必要

があると考えられる。また、二次的な問題の予防の観点からも日常性がある配慮や支援の抽出が求められる。

そこで、本研究では、研究1として保育者が捉える不器用な子どもの実態を明らかにしつつ、そのような子どもに対する配慮や工夫といった保育者の実態を質問紙調査によって把握することを目的とする。続いて、研究2として多様な経験年数の保育者にインタビュー調査を実施し、研究1でカバーできないより詳細な配慮事項や実践など、実態を掘り下げることを目的とする。

不器用さがある子どもへの配慮や支援は、身体を大きく動かすことができる環境が身近にあるか否か等、保育環境によって大きく変わると予想した。たとえば、身近に大きく身体を動かすことができる保育環境が日常的にあり、そのような環境で生活しているか否かなどである。つまり、園庭がある場合、身体を十分に動かすことができ、継続的に運動することができる。そこで、運動の機会や量に差が生じないように、研究1、2ともに近似した保育環境である「園庭がある保育園」に限定した。さらに、両研究ともに、個々の保育者がイメージする子どもの不器用さにバラツキがあると想定した。そこで、一定程度の指針を得るために研究対象者に対し、本研究における身体的な不器用さを、「高次で合目的な運動において極度に不正確あるいは低レベルのパフォーマンスしか発揮できない子どもの運動行為¹⁸⁾」と設定した。研究1では、質問紙に定義や具体的な子どもの姿を明記した。研究2では口頭で説明し、保育場面をいくつか例として提示し、インタビューを実施した。

Ⅱ. 研究1：質問紙調査

1. 目的

質問紙調査から、保育所保育士が不器用だと感じる子どもの特徴や配慮事項など、保育士の実態や支援を把握する。

2. 方法

1) 研究対象者と手続き

研究対象者：広く、かつ自然が豊かで身体を十分動かすことができる園庭がある保育所の保育士である。

研究方法：調査施設を通して、保育士にアンケートの概要を示した用紙と研究同意書を配布した。概要を示した用紙にはQRコードを記し、電子媒体による調査を実施した。

分析方法：「よくある」「ある」と答えた保育士には、配慮事項及び難しいこと等と保護者との連携についてすべての項目において自由記述欄を設けた。自由記述を計量テキスト分析 KH Coder で分析した。KH Coder とは、

PC上で計量テキスト分析を行うためのアプリケーションソフトである。「計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析を行う方法¹⁹⁾」である。量的な方法でデータの整理・探索しつつも、分析の中心となるのは質的な記述であり、本研究は不器用な子どもに対する配慮等に関する記述という大量データを使用したり、捉え方について探索的に探ったりするため、本分析が適していると判断した。さらに、文などに記述された語の出現状況を計量的に分析し、その類似性や関連性などから記述されたテキストに含まれる記述者の意図を推測する手法も適していると判断した。今回は、語の関係性を客観的に評価し、全体的な傾向を明らかにするために共起ネットワークを示す。またKH Coderには、ある文字列（単語）が出現した位置を検索し、その前後の文字列との関連から文脈を確認できるKWICコンコーダンス機能（以下、コンコーダンス）がある。必要に応じてコンコーダンスを使用し、頻出語の内容を検討した。なお、本研究は経験年数を1群：3年未満、2群：3～10年、3群：10～16年、4群：16～20年、5群：20年以上とし、5つの年齢群にわけて比較した。

2) 倫理的配慮：本研究は、こども教育宝仙大学学術研究倫理委員会の承認を経て実施されており、利益相反は生じていない（承認番号20-0001）。

3) 質問紙の構成：属性は、性別、園庭の有無、年齢、公立・私立、経験年数、不器用さがある子どもとしてイメージした子どもの年齢である。項目は、不器用だと感じる子どもについて、である。項目は、水野他(2013)²⁰⁾を採用した。本項目は、気になる子どもの姿として175項目ある。採用理由は、①DCDをはじめとする障害特性の項目ではないこと、②保育士にとって気になる行動であること、である。本研究では、不器用さにかかる項目のみを採用する。

不器用さに関連する行動領域が3領域で構成され、「基本的生活習慣の領域」「作業の領域」「運動の領域」である。それぞれ5項目、4項目、8項目、合計17項目であり、本研究ではこれを使用する。ただし、項目素材の特性上、「どれも不器用な行動」と判断・返答が一律に為される可能性も予測されたため、多重解答形式を採用した。次に、「生活習慣」「製作活動」「遊び」への配慮及び「難しいこと・困っていること」「不器用だと感じる子どもの保護者との連携」の有無とその内容（自由記述）、である。配慮事項及び難しいこと等と保護者との連携の有無は、「よくある」「ある」「あまりない」「まったくない」の4件法とした。

3. 調査対象者の属性

1) 対象者：44名であった。

2) 男女比：男性7名（15.9%）、女性37名（84.1%）であった。

3) 年齢：20～24歳 12名（27.3%）、25～29歳 2名（4.5%）、30～34歳 6名（13.6%）、35～39歳 4名（9.1%）、40～44歳 6名（13.6%）、45～49歳 4名（9.1%）、50～54歳 5名（11.4%）、55歳以上 5名（11.4%）であった。平均年数37.7歳、SD=13.1であった。

4) 所属：公立保育所12名（27.3%）、私立保育所32名（72.7%）であった。

5) 保育経験年数：3年未満が6名（13.6%）、3～10年が13名（29.5%）、10～16年が7名（15.9%）、16～20年が7名（15.9%）、20年以上が11名（25.0%）であった。

6) 役職：クラス担任が28名（63.6%）、園長が4名（9.1%）、主任（副主任）が3名（6.8%）、主任保育士が3名（6.8%）、フリー保育士が2名（4.5%）、学年主任（乳児、幼児リーダー）が1名（2.3%）、一時預かり職員が1名（2.3%）であった。

4. 結果と考察

最初の質問項目において、不器用さがある子どもとしてイメージした子どもの年齢を質問したところ、年長児が18名（40.9%）、年中児が13名（29.5%）、年少児が13名（29.5%）であった。

4-1 「不器用だと感じる子どもの行動」について

「不器用だと感じる子どもの行動」について質問したところ、順に「15. 指先で小さなものをつまめない16名（36.4%）」「17. からだの動きがスムーズでない15名（34.1%）」「11. はさみをうまく使えない14名（31.8%）」「1. 着替えなどに時間がかかる11名（25.0%）」であった。指先を使うボタンの着脱や衣服の着替えといった日常的な動作からはさみを使うことが多い一斉での活動における行動まで、保育士は一日の生活においてまんべんなく不器用さに着目していることがわかった。見方を変えれば、保育士は園生活の様々な場面において子どもの不器用さに着目しているといえる。

4-2 「基本的生活習慣（着替えや食事等）への配慮」について

「基本的生活習慣（着替えや食事等）への配慮」について質問をしたところ、「よくある6名（13.6%）」「ある28名（63.6%）」「あまりない10名（22.7%）」「まったくない0名（0%）」であった。「よくある・ある」と回答した77.2%の共起ネットワークを図1に示す。3年未満及び3～10年は、「絵」「カード」「伝える」といった語彙が抽出されており、時間内に終わることや順序をわかりやすく提示するための絵カードなどの視覚支援を活

表1 不器用だと感じる子どもの行動

No.	質問項目	件数	回答率(%)*
1	着替えなどに時間がかかる	11	25.0
2	ボールつきがうまくできない	4	9.1
3	作品を作るのに時間がかかる	8	18.2
4	ぎこちない走り方をする	8	18.2
5	洋服の前後を間違えて着る	5	11.4
6	閉じた丸が描けない	2	4.5
7	階段を一步一步交差のパターンで下りられない	5	11.4
8	連続ジャンプができない	2	4.5
9	雑巾やおしぼりをうまく絞れない	8	18.2
10	スキップができない(4歳児以上)	5	11.4
11	はさみをうまく使えない	14	31.8
12	まっすぐに走れない	2	4.5
13	お菓子の袋を破れない	8	18.2
14	リズムうちが苦手である	6	13.6
15	指先で小さなものをつまめない	16	36.4
16	コップの水などをよくこぼす	3	6.8
17	からだの動きがスムーズでない	15	34.1

* 回答者に対する比率

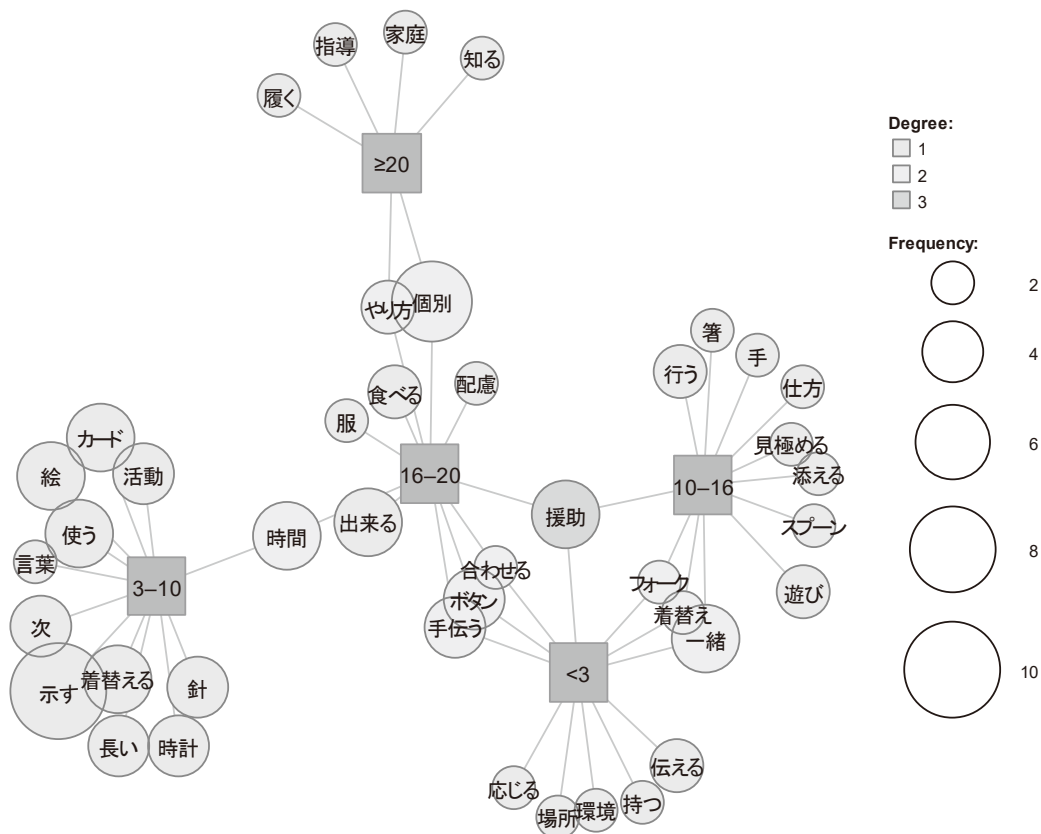


図1 基本的な生活習慣(着替えや食事等)への配慮に関する共起ネットワーク図

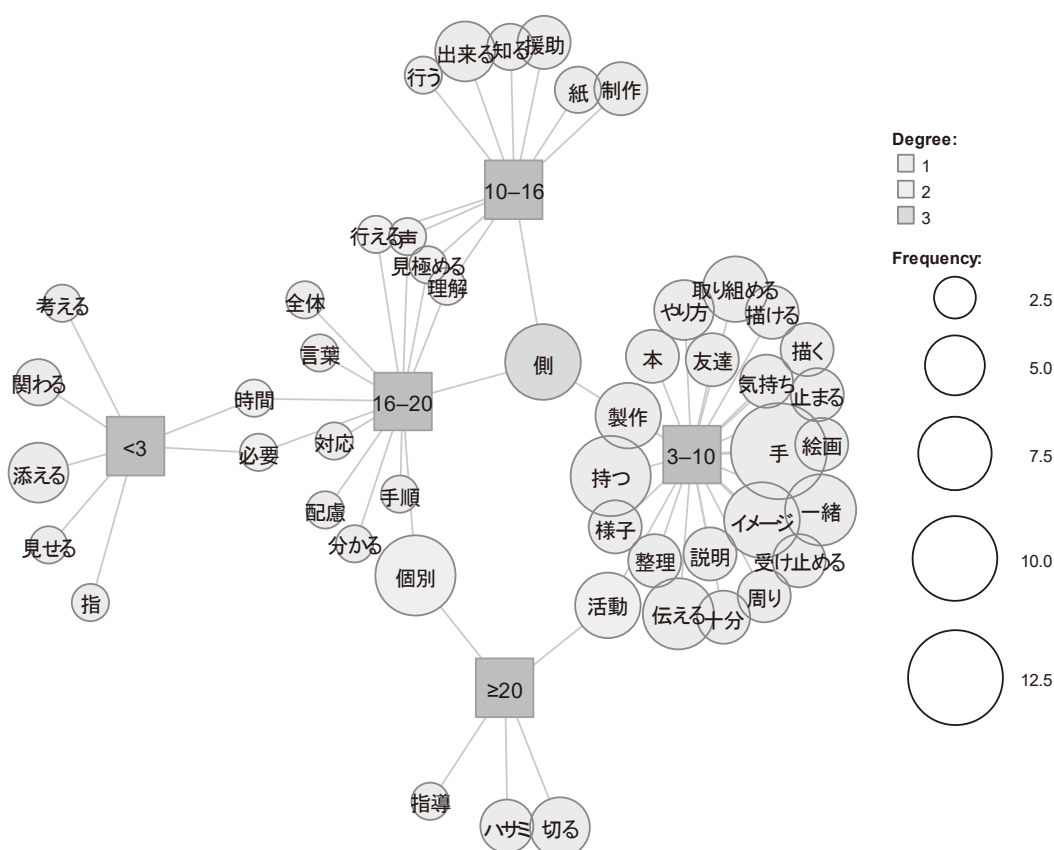


図2 製作活動における配慮に関する共起ネットワーク図

用していた。10～16年は、「手」「仕方」「教える」といった語彙が抽出されており、不器用さの程度を確認しつつ、手を添えながら一緒に行う配慮をしていた。16～20年は、「箸」「できる」「見極め」といった語彙が抽出されており、子どもの「できること」を保護者に確認しながら状態を見極めて使用しやすい食具・着脱しやすい衣服の用意や余裕をもった時間設定、などをしていた。20年以上は、「家庭」「知る」「個別」といった語彙が抽出されており、家庭と情報を共有することを優先し、子どもにとってより生活をしやすい環境を目指していた。

経験年数が増えるにつれ、視覚的に訴える支援から手を添えるなど直接的な支援に変化していくことがわかった。あわせて、不器用さにあわせて家庭と連携を強めている。具体的には、家庭との情報共有から保護者に対して家庭でしてほしいことの依頼、に変化していくことがわかった。

4-3 「製作活動における配慮」について

「製作活動における配慮」について質問をしたところ、「よくある 6 名 (13.6%)」「ある 32 名 (72.7%)」「あまりない 6 名 (13.6%)」「まったくない 0 名 (0%)」であった。「よくある・ある」と回答した 86.3% の共起ネットワークを図 2 に示す。3 年未満は、「添える」「時間」「関わる」といった語彙が抽出されており、不器用さを受け

止めたうえで時間をかけて説明する、あるいは保育士と一緒に子どもの手を添えながら取り組んでいた。3～10 年は、「絵画」「やり方」「一緒」といった語彙が抽出されており、手本を示し、一緒に描画していた。10～16 年は、「見極める」「援助」「紙」といった語彙が抽出されており、子どもが「どこまでできるか?」を見極め、難しそうならば部分的に補助をしていた。素材・画材を子どもの状態に応じて変更していた。16～20 年は、「時間」「個別」といった語彙が抽出されており、個別の時間を設け、対応していた。20 年以上は、「はさみ」「切る」「指導」といった語彙が抽出されており、ハサミなど不器用さから難しい活動に対しては個別の指導をしていた。

3 年未満の保育士は、製作活動時間中、苦手さがあるポイントへの支援ではなく、工程の最初から最後まで支援をしていた。一方、10～16 年はできなかつたり難しいと保育士が判断したことに対する部分的な支援であった。また、16～20 年の保育士は、全体の活動以外の時間で個別対応をしていたが、20 年以上の保育士は全員での活動において、個別対応をしていた。経験を重ねることで全体への指導と並行して個別対応ができるようになると考えられる。

4-4 「身体を使った遊びにおける配慮」について

「身体を使った遊びにおける配慮」について質問した

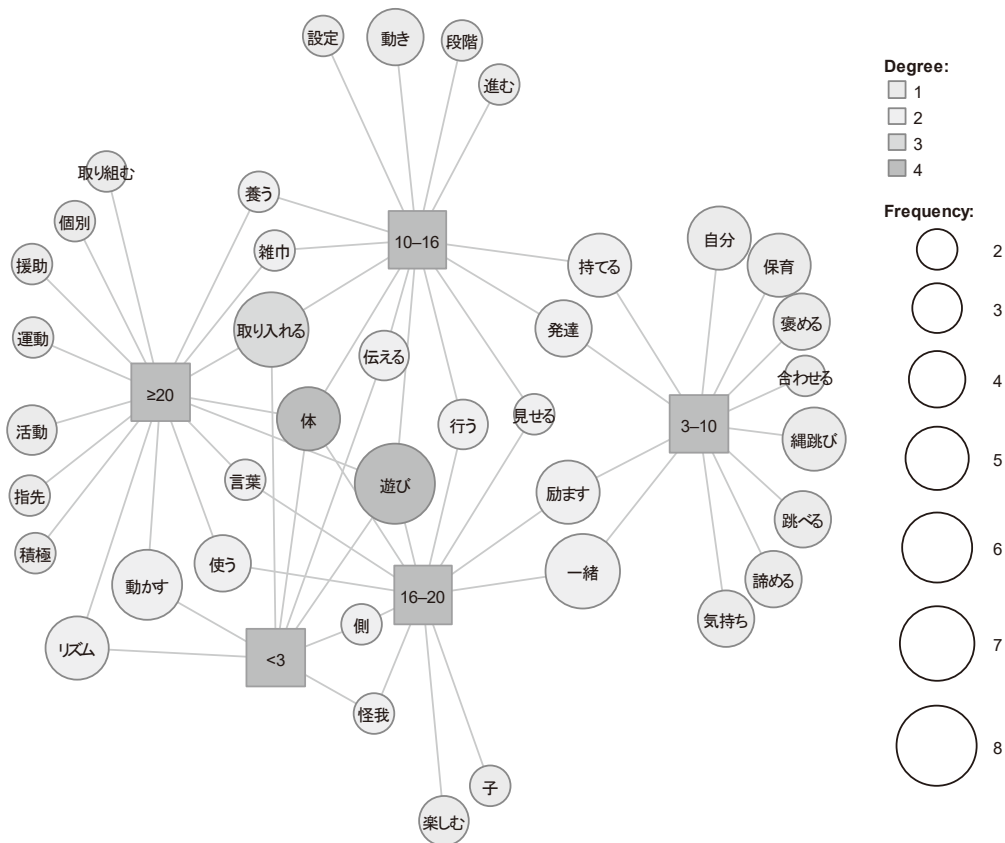


図3 身体を使った遊びにおける配慮に関する共起ネットワーク図

ところ、「よくある3名(6.8%)」「ある29名(65.9%)」「あまりない11名(25.0%)」「まったくない1名(2.3%)」であった。「よくある・ある」と回答した72.7%の共起ネットワークを図3に示す。3年未満は、「言葉」「動かす」「遊び」といった語彙が抽出されており、言葉をかけながら、適宜身体を使って遊んでいた。3～10年は、「跳べる」「褒める」「励ます」といった語彙が抽出されており、「登る・降りる」など多様な動きがある運動をする子どもを励ましつつ、褒めながら遊んでいた。10～16年は、「設定」「段階」「養う」といった語彙が抽出されており、簡単な目標を設定し、達成感を味わうために雑巾がけ等で身体の動きを養うようにしていた。16～20年は、「一緒」「楽しむ」といった語彙が抽出されており、一緒に体を動かして励ましの言葉をかけながら楽しく遊んでいた。20年以上は、「リズム」「指先」といった語彙が抽出されており、リズム遊びや指先を使う遊びを個別に取り入れていた。

経験年数を問わず、楽しむことや喜びを感じられるように遊んでいる現状があった。多くの保育士が子どもの心情を重視し遊びを支えていると考えられる。経験を重ねるごとに目的をもって一緒に遊んだり、促したりしていた。

4-5 「難しいと感じたり、困ったりすること」について

「難しいと感じたり、困ったりすること」について質問したところ、「よくある1名(2.3%)」「ある18名(40.9%)」「あまりない24名(54.5%)」「まったくない1名(2.3%)」であった。「よくある・ある」と回答した43.2%の共起ネットワークを図4に示す。3年未満は、「伝える」「動き」といった語彙が抽出されており、口頭で身体の動きを伝える難しさがあった。3～10年は、「やる気」「生活」「自分」といった語彙が抽出されており、うまくいかないことからやる気を損なわないように援助する難しさがあった。10～16年は、「伝える」「援助」「方法」といった語彙が抽出されており、子どもの不器用さへの具体的な援助の方法に難しさを感じていた。16～20年は、「意識」「苦手」といった語彙が抽出されており、苦手意識を強めないことへの関わりの難しさがあった。20年以上は、「難しい」「意欲」「自分」といった語彙が抽出されており、意欲を保障しつつ、どこまでを子どもが自分であるか、といったポイントの見極めに難しさがあった。

どの経験年数の保育士においても、やる気や意欲を維持することや苦手意識を抱かないようにするための配慮への難しさがあった。

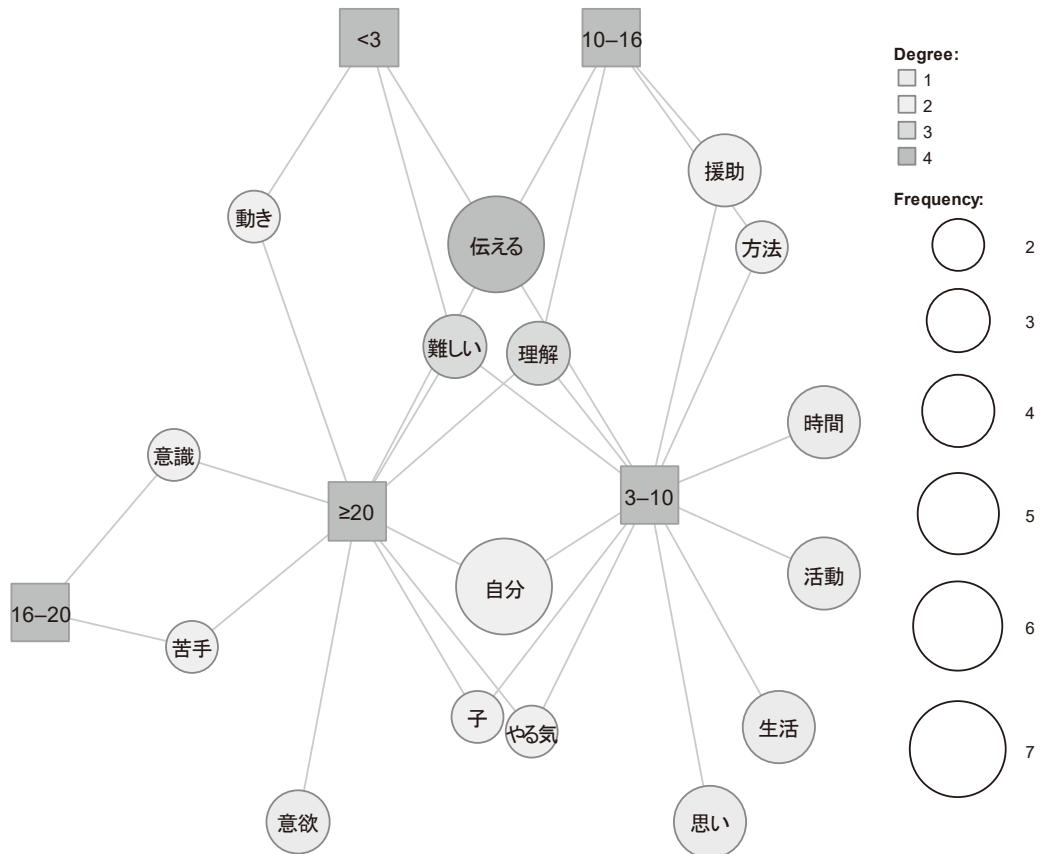


図4 難しいと感じたり、困ったりすることに関する共起ネットワーク図

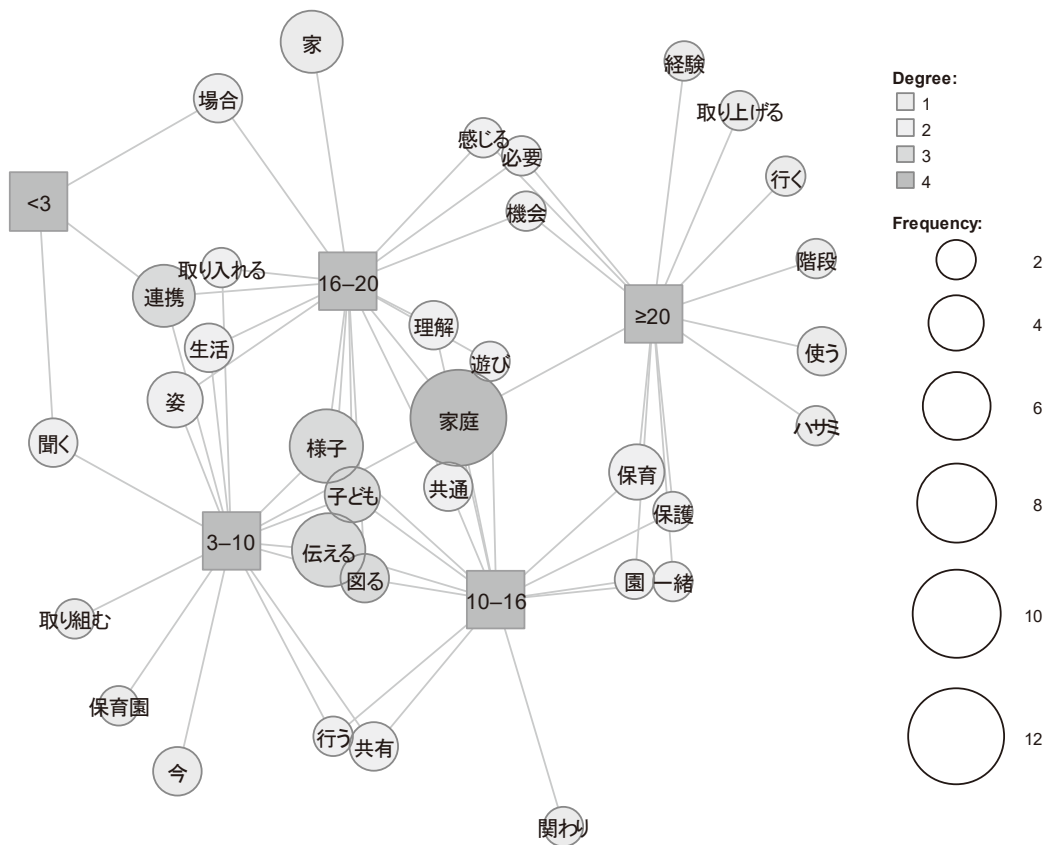


図5 不器用に対する保護者との連携に関する共起ネットワーク図

4-6 「不器用に対する保護者との連携」について

「不器用に対する保護者との連携」について質問したところ、「よくある2名(4.5%)」「ある19名(43.2%)」「あまりない21名(47.7%)」「まったくない2名(4.5%)」であった。「よくある・ある」と回答した47.7%の共起ネットワークを図5に示す。3年未満及び3～10年未満は、「聞く」「取り組む」「今」といった語彙が抽出されており、保護者に現在の家での様子を聞き、園でできそうな支援を取り入れていた。また、園での様子も保護者に知らせていた。10～16年は、「共通」「園」「一緒」といった語彙が抽出されており、家・園の共通の関わりを目指し、コミュニケーションを図っていた。16～20年は、「生活」「取り入れる」「家」といった語彙が抽出されており、家での生活の様子を聞き、園で取り入れていることを伝え、家でもやってもらっていた。20年以上は、「経験」「機会」「必要」といった語彙が抽出されており、子どもに必要なと思われる経験が自宅でできるよう、家庭でやる機会を設けてもらっていた。

10年未満は「保護者から聞いた家での実践」を園で取り入れているのに対して、16～20年は「園での実践」を保護者に伝えて実践を依頼し、20年以上は必要と判断したことを家で実践するよう依頼する、といった連携の取り方に変化していた。

5. 研究1における総合考察

研究1の結果・考察から以下の2点が明らかとなった。

1点目は、保育士の多くが子どもの心情面への配慮を心がけていた。これは、保育士が子どもに不器用さがあることで、様々な場面で失敗して劣等感を抱かないように心掛けていると考えられる。図4から、心情面への配慮を意識していることから「難しいと感じたり、困ったりすること」の多くが、苦手意識の軽減や意欲向上が挙げられている。特に、経験年数の4群、5群は技術面よりも心情面への配慮を心がけていた。先行研究でも不器用そのものが問題ではなく、二次的な問題(劣等感・不安感増加、いじめの標的等)を取り上げている²¹⁾。保育士は、自覚的に心情面へのフォローを意識していることが明らかになった。今後は、心情面へのフォローの大切さを保護者と共有しつつ、一緒に取り組むことができる関係の構築が望まれる。

2点目は、保護者との連携は経験年数が増すごとに保護者への直接的な働きかけが多くなっていく傾向があった。経験年数が増えていくにつれ、経験年数の1群・2群は「(園でできそうなことを)園に取り入れる」「(園での)取り組みを保護者に知らせる」といった保育者が主となり、動くやり方であった。一方、経験年数が10年以上の3、4、5群は「家でもやってもらおう」「機会を

設けてもらう」といった保護者に積極的に関わり、家庭・園問わず同じ関わりになるようなやり方に変化している。新任保育士にとっては、直接的に保護者に依頼する行為が難しい傾向があると推測され、経験を積むことで依頼方法を身につけていくことができると考えられる。さらに、経験を積みながら、家庭でも実践してもらうことでより効果的に不器用さが軽減できることを学んでいるとも考えられる。

Ⅲ. 研究2：インタビュー調査

1. 目的

保育所保育士に対してインタビューを実施し、身体を使って遊ぶ際に配慮していることや実践していること、不器用さがあると感じる子どもやその保護者への配慮事項などを解明する。

2. 方法

1) 研究方法：保育所保育士に対する半構造化面接法によるフォーカス・グループ・インタビュー(以下、FGI)を実施した。FGI採用理由は、グループダイナミクスによる相互作用から潜在的な実践知まで引き出せるからである。近似した経験をしている保育士同士、自然体でかつそれぞれの特徴を引き出せると考えた。インタビューにあたり、インタビューガイドを作成した(表2)。
2) 研究対象者：園庭がある保育所の保育士7名である。平均年数28.14年、SD=19.91であった(表3)。本研究では保育内容や保護者への配慮など、保育士の対応にか

表2 インタビューガイド

- | |
|---|
| ① 園庭などで身体を使って遊ぶ際に配慮していることや実践していること |
| ② 保育中、基本的な生活習慣について困難を感じる子どもやその子どもへの配慮事項など |
| ③ 不器用な子どもの保護者とのやり取りや工夫の内容 |

表3 インタビュー対象者の属性

性別	職位	年齢	経験年数
女性	園長	65歳	45年
女性	保育士	25歳	6年
男性	保育士	34歳	14年
女性	園長	66歳	46年
女性	園長	68歳	39年
女性	副園長	65歳	45年
女性	保育士	22歳	2年

表4 スプレッドシートの一部

番号	発話者	テキスト	〈1〉 テキスト中の注目すべき語句	〈2〉 テキスト中の語句の言い換え	〈3〉 左を説明するようなテキスト外 の概念	〈4〉 テーマ・構成 概念（前後や全体の 文脈を考慮して）
1	C	順を追って成長・発達をして いるか確認はします。	順／成長・発達／ 確認	順序性／確認作業 ／手続き	子どもの着目点／ 重要視／必須	発達を読み解く羅 針盤
2	C	ただ、遊んでいから大丈夫 か、とかではなくて、いつも 気にしていますね。遊具の使 い方や遊び方を一つ一つ伝え ていかないとダメだって。	いつも気にしてい ます／遊具の使い 方や遊び方を一つ 一つ伝えていかな いとダメ	継続的な配慮／遊 具の使用方法和遊 び方の確認／指導 の強い必要性／細 やかな支援	遊具と遊び方の理 解不能による支援 ／個別対応の必要 性／環境の不一致	環境の不一致によ る継続性と細心の 支援
3	D	職員体制は大きい問題です ね。園庭に出る時は、職員体 制を共有してから出ます。	職員体制は大きい 問題／園庭に出る 時／職員体制を共 有	職員配置の重要性 ／園内連携／園庭 遊び／保育士の人 数と配置の徹底	見落としの無い配 置／フォロー可能 な園庭／保育士の 人数と配置が最優 先	子どもを支援する ための配置検討／ 事前対策の徹底

かる傾向性を探るためあえて経験年数に幅をもたせた。自由に発言できるよう、事前に個々のパーソナリティ特性を把握したうえで、割り振りの順番と方法を工夫した。3) インタビュー時間：56分であった。また、総文字数は21,491文字であった。

4) 分析手順：逐語録化したデータをSCAT（Step for Coding and Theorization）により、分析した。SCATとは、比較的小規模なデータの分析に適しており、4ステップにより構成概念を抽出するコーディングと、構成概念を紡いでストーリーラインを作成する手続きからなる分析手法である²²⁾。①テキストデータの中の注目すべき語句を書き出し、②書き出した語句を言い換え、③②の内容をデータの文脈で説明し、④全体をよく読み、構成概念を生成する。本研究では不器用な子どもへの保育の実践に埋め込まれた実態を明らかにすることを目的としているため、文脈に含まれる潜在的な意味を見出し、新たな概念を導出して、構成概念から理論構築していくSCATが適切であると判断した。

3. 倫理的配慮

インタビュー前に、口頭・書面で研究の目的を伝え、本研究の公表にあたっては、個人が特定できないよう配慮する旨を伝えた。なお、本研究は、こども教育宝仙大学学術研究倫理委員会の承認を経て実施されている（承認番号22-0001）。

4. 結果と考察

構成概念は、30個であった。インタビューデータをもとにスプレッドシートを作成した。一部を表4に示す。調査対象のストーリーラインは、「日常的な保育にお

ける支援」「同僚保育士との連携」「自尊感情への支援」「保護者との連携」の4つに大別された。

4-1 「日常的な保育における支援」のストーリーライン

子どもの不器用な動きは、保育士にとって「発達を読み解く羅針盤」となり、「発達にあわせた保育実践」を検討することになる。「運動の必要性への痛感」をしていることから、「運動不足への警戒」を抱き、「運動経験確保への取り組み」や「環境の不一致による継続性と細心の支援」をする。また、「体幹の希求」をするため、「不断の身体づくり」として「活動における運動の埋め込み」と「遊びに埋め込まれた全身運動」を目指す。具体的には、「制御機能の向上」を高める「身体の自覚化を目的とするトレーニング」である。この実践の過程において、保育者は身体を動かすことを敬遠する姿から「苦手なことから支援」「子ども・保育者による“楽しい”の探求」「日常で求められる動作への継続的な支援」といった「保育場面の救済」を試みる。

保育士は、子どもの不器用さを発達の読み取る視点の一部として捉えていた。そのため、不器用さへの取り組みを念頭に置いて、積極的に支援をしていた。日常的な遊びの場面や活動場面など、身体を動かす機会を設け、体幹を鍛えるとともに、落ち着いて集まりや活動に参加できるように動きをコントロールできるようにするための配慮をしていた。あわせて、不器用さがあることから保育中の様々な場面で子どもが困っているため、運動への苦手意識が増加しないようまずは苦手なことから支援しつつ、あくまでも楽しいと感じられる支援を心掛けていることが示された。

4-2 「同僚保育士との連携」のストーリーライン

「同僚保育士との連携」として「経験不足への課題意識」を共有したうえで「子どもを支援するための配置検討」や「事前対策の徹底」をする。同僚保育士とは、「逐一確認の必要性」の確認をしている。

不器用さへの支援には、担任（担当）保育士のみが行うのではなく、同僚保育士と連携を取りながら行っていた。その際、経験不足が背景にあると共通で理解しているため、園庭などで身体を大きく動かす場面においてはそれぞれの配置を相互で検討したり、苦手なこと等の情報を共有したりするといった取り組みをしていた。

4-3 「自尊感情への支援」のストーリーライン

不器用な子どもは、生活のしづらさから多様な場面で苦慮しているため、「困難感への理解」をして「自尊感情への下支え」をして「保育者が抱く優先的な配慮」をする。これまでの経験から「賞賛の必要性」を自覚しており、「賞賛の集団における有効活用」をすることで「モチベーション維持の死守」を目指す。

保育士は不器用さから生じる自尊感情の低下を自覚しているので、自尊感情への支援を優先的にしていた。みんなの前で褒めることを心がけており、運動への苦手意識を無くすよう配慮していた。

4-4 「保護者との連携」のストーリーライン

「保護者支援の必要性」を感じ、「保護者のバックアップ」といった家庭環境も視野に入れた支援で「家庭の状況を加味した保育士の専門性の高さ」がうかがえる。

不器用さへの支援には、家庭との連携は不可欠であることから、家庭環境も含めた情報を整理し、支援体制を構築していた。保護者が子どもの不器用さをどこまで気にしているか、といったことを確認し、無理のない範囲の支援の協力を保護者に求めている。

5. 研究2における総合考察

具体的な保育実践から保護者との連携まで、保育士による実態が明らかになった。研究2における総合考察として、いくつか整理できる。

1点目は、自尊感情への低下を防ぐことを念頭に保育をしている現状があった。まず保育士は子どもの多様な発達を踏まえつつも、不器用さを発達の指針としている面があった。その不器用さを加味した保育実践をしていた。不器用さの背景や原因を探りつつ、日常生活の至るところで困難を抱えている現状に着目している。そのうえで、通常の保育とは別に、個別に設けた時間や場所での

支援ではなく、あくまでも保育場面に埋め込む形で実践をしていた。そこには、体幹の大切さや運動不足への危惧を自覚しながら、意図性をもって身体を動かしたり、（遊びの中での）時間を確保したりしていた。さらに、不器用な子ども特有の集団における失敗経験の蓄積を考慮し、“あえて”みんなの前で褒める場面を積極的に設けたり、運動へのモチベーション維持に注力したりしていた。これらのことから二次的な問題を生じさせないように、配慮していることがわかった。

2点目は、同僚保育士や保護者との連携にも取り組んでいた。不器用さは、場所や時間を問わず、様々な場面で露呈するものである（たとえば、手指を使う衣服の着脱や食具の使用など）。この意味では、同僚保育士や保護者が当該児に対して不統一の支援をした場合、明らかに子どもが混乱する。したがって、不器用な子どもにかかわるすべての同僚保育士や保護者とも「(子どもに)何をどこまで求めるのか?」を共有することが求められる。さらに、支援のやり方を統一する必要がある、これらを実行するための情報共有がなされていた。

今後は、多忙を極める保育士の現状において、さらに限られた時間で効率を上げる同僚保育士や保護者との相互のコミュニケーションや会議の在り方の検討が求められるだろう。

IV. 総合考察

本研究では、不器用さがある子どもの姿を明らかにしつつ、そのような子どもに対する配慮や工夫といった保育士の実態を質問紙調査及びインタビュー調査の実施から、明らかにすることを目的とした。保育士は、子どもの身体の不器用さに着目しながら、それに対する具体的な支援をしている実態が浮かび上がった。これら2つの研究結果から特記すべきことを、次の2点から考察する。

1. 心情面への配慮

本研究結果から、子どもの不器用さに対する支援を考える際、自尊感情の低下を防ぐことや身体を動かすことへの抵抗感を抱くことへの配慮をしていることがわかった。保育士は、不器用さから生じる心情面への悪影響を感じており、これまでの保育のなかで容易にやる気の無さが生じることを経験していたと思われる。研究2における「賞賛の集団における有効活用」が象徴している通り、集団生活で褒められる体験に対して意図的に設けていた。このような配慮は、自主的に実践しているのが現状であるため、保育士間で共有しながら、意識的に保育内容に取り入れていく必要がある。あわせて、本研究結果を広く保育現場に発信していくことが求められる。

杉山 (2001)²³⁾は、動きの不器用さはそれ自体が問題であるというよりは、不器用さが子どもの心理面、社会的な側面に及ぼす影響のしかたによって問題となりうる、と述べている。松原 (2012)²⁴⁾も、運動面の困難さは周知に理解されにくく、本人にはかなりのストレスになっていることが多いことを指摘している。このことは、不器用さが起点でストレスを抱えるが、周囲にとってその困難は伝わりづらいとともに、不器用さから生じる心理的悪影響の方を重視する必要性を示している。

今後は、さらに運動機能を高める遊びや効果的な賞賛の仕方を園内外の研修を通して学ぶ機会を設けていく必要があるだろう。さらに、ストレス軽減の目的として、早期発見のための保育中に不器用さを把握するための保育士が実施可能なチェックリストの開発などが求められる。

2. 同僚保育士・保護者との連携

保育士は、子どもの苦手なことをはじめとする情報の共有や苦手さをカバーする人員配置を検討していた。不器用さがある子どもについて同僚保育士と連携していることがわかった。あわせて、保護者に家庭でやってもらいたいことへの依頼や子どもの不器用さにかかる現状の共有などの支援の実態があった。大場²⁵⁾は、保育者が保護者に対して単独で支援を行うのではなく、園全体での連携が子どもと保護者双方への支援につながる、と指摘している。つまり、同僚保育士との連携を通して、保護者支援が充実していくことを示している。本研究結果では、同僚保育士・保護者と連携をしている実態があり、子どものみならず保護者への支援も充実していると考えられる。今後は、園内での情報共有の仕方、例えば保育カンファレンスや職員会議等における内容を詳細にする必要があるだろう。

川島・奥田 (2017)²⁶⁾は、不器用さがある子どもの問題は親の主訴となることは少ない、としている。つまり、子どもの不器用さは親にとっては気づきづらい面を有していると言える。したがって、いかに保護者に子どもの不器用さについて日常の姿を保護者に提示しつつ、理解してもらうかが重要になってくる。新任保育士は、保護者よりも先に不器用さに気が付いていることを鑑みると、気づきを具体的な支援につなげるとともに、まずは保護者に具体的に理解してもらえようような伝え方を検討する必要があるだろう。

V. 本研究の限界と課題

本研究では、不器用な子どもに対して日常的な保育場面での保育士による配慮や工夫について、障害を前提と

したチェックシートの活用や特定の課題を課しての不器用さの解明といった特別性を排除した形で示したことに独自性がある。

しかし、本研究の限界として①職位や経験年数などの厳密性を担保した状態での調査ではないことから、全体を示す保育士の配慮や工夫等の傾向を示したにすぎないこと、②支援として表現されたものの内容を具体的な実践として解明できていないこと、が挙げられる。①に対しては、今後厳密に職位や経験年数別で捉え、調査対象者を増やして調査する必要があるだろう。②に対しては、保育場面の観察やさらなるインタビューを通して具体的な支援内容を掘り起こす必要がある。

文献

- 1) 守巧・山崎摂史・駒井美智子 (2013) 気になる子どもに対する保育の検討—「対象児の支援」「クラス集団作り」「保育展開の工夫」の視点から—。東京福祉大学・大学院紀要 4 (1), 23-31.
- 2) 西川ひろ子 (2019) 保育所における気になる子どもへの保育士が行う運動遊びを用いた支援と課題。安田女子大学紀要47, 143-154.
- 3) 前掲 1)
- 4) 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 (2003) 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査。発達障害研究, 25 (1), 50-61.
- 5) 末次絵里子 (2019) 保育者へのコンサルテーションにおける子どもの人物画の有効性。大阪総合保育大学紀要, 14, 97-111.
- 6) 村井憲男・村上由則・足立智昭 (2001) 「気になる子どもの保育と育児」。福村出版.
- 7) 水野友有・平野華織・別府悦子 (2013) 幼稚園・保育所における「気になる」子どもの実態調査 (第3報) 「気になる」子どもの不器用さに関する分析による検討。中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要14, 75-80.
- 8) 三上美咲・斉藤まなぶ・高橋芳雄・足立匡基・大里絢子・増田貴人・中井昭夫・中村和彦・山田順子 (2017) 幼児期における協調運動と行動及び情緒的問題の関連。保健科学研究 8, 17-24.
- 9) 川島民子・奥田援史 (2017) 幼稚園における幼児の不器用さの実態。滋賀大学教育学部紀要67, 101-107.
- 10) 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説。フレーベル館.
- 11) Losse, A., Henderson, S. E., (1991) Some application of the Henderson revision of the Test of Motor Impairment. *British Journal of Educational Psychology*, 57, 389-400.
- 12) Cantell, M. H., Smyth, M. M., and Ahonen, T. P. (1994)

Clumsiness in adolescence: Educational, motor and social outcomes of motor delay detected at 5 years. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 11, 115-129.

- 13) 瓜生淑子・浅尾, 恭子 (2013) 幼児の身体的不器用さに関する予備的研究—協調運動の実技調査から—. 教育実践開発研究センター研究紀要22, 1-9.
- 14) 奥田援史 (2007) 幼児の身体的不器用さに関する研究. 滋賀大学教育学部紀要 I 教育科学57, 1-5.
- 15) 渋谷郁子 (2008) 幼児における協調運動の遂行度と保育者からみた行動的問題との関連. 特殊教育学研究46(1), 1-9.
- 16) 前掲15)
- 17) 奥田援史 (2009) 幼児の身体的不器用さに関する研究 (2): Foot-Hand Matching 課題を用いて. 賀大学教育学部紀要 I 教育科学59, 121-126.
- 18) 前掲17)
- 19) 樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析. ナカニシ出版.
- 20) 前掲7)
- 21) 前掲13)
- 22) 大谷尚 (2011) SCAT: Steps for coding and Theorization: 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. 感性工学10(3), 155-160.
- 23) 杉山登志郎 (2001) 運動発達における問題. 辻井正次・宮原資英 (編) 子どもの不器用さ—その影響と発達の援助—. プレーン出版, 58-65.
- 24) 松原豊 (2012) 知的障害児における発達性協調運動障害の研究—運動発達チェックリストを用いたアセスメント. こども教育宝仙大学紀要 3, 45-54.
- 25) 大場幸夫 (2008) 保育者相互の支え合い (総説). 保育学研究, 46(2), 11.
- 26) 前掲9)
- 27) 前掲17)

謝辞

忙しい仕事の合間を縫って本研究にご協力頂いたすべての先生方に深く感謝申し上げます。

付記

本研究の一部は、環境福祉学会第18回年次大会において発表した内容を含むものである。また、本研究は2022年度こども教育宝仙大学学長裁量経費の助成を受けて行われている。